

## 雑事記 (32)

盛丘 由樹年

### 戦争遺跡探訪 (8)

今回は戦争遺物というべきものを見て回った。

実物を見ることは、聞いたり読んだりするより、やはり重みがある。自分も行ってみたいという人の参考のために、この一文の中で場所や道順を簡単に説明したが、読者は事前に地図などで調べて、よく確かめてから行く方がよいだろう。

#### ① 二つのエンジン残骸 (青梅市郷土資料館)

数年前に私は、青梅市郷土資料館にB29爆撃機のエンジンが展示されているという情報を得てはいたが、損傷が大きいというので、見る価値に疑問を持ち、見に行くのはしばらくためらっていた。それでも、2019年8月18日、多摩地区方面に行く機会があったので、一見するだけでもと思い、電車を乗り継ぎ、3時間かけて行ってみた。

青梅駅を降り、吊り橋ふうの橋を通り多摩川を渡った。眼下の広い河原には、多くの家族づれが川遊びを

していた。多摩川の流れはかなり速そうだったから、子どもが流されたりしないか、やや心配になった。橋を渡ると、かやぶき屋根の古民家があったので、のぞいてみた。各地で古民家が保存され、展示物になっている。いくつか観てきたので、これはありふれた農家の古民家の一つだったが、それなりに私は興味を持っている。困炉裏端で火を絶やさない管理人の女性から簡単な説明を聞いた。成木地区からここに移築されたという。(成木といえ、数年前に私は仏像を尋ねていった地域だった)

その先に、近代的ながらも寂れたさびような建築の郷土資料館があり、玄関ドアを開けると、すぐ目の前にお目当てのそれらがあった。アメリカ軍と日本軍の爆撃機のエンジンが並べられて置かれている。おもしろい対比だ。

次ページ写真左側のエンジンはボーイングB29のものだ。1945年4月2日未明にB29の100機以上の大編隊が武蔵野・立川・小平の軍事施設や軍需

工場（主に中島飛行機の工場）を空襲した。このとき爆撃の正確度を上げるため、比較的低空を飛んだから、そのうちの一機が高射砲で撃たれ、破損した。火災が発生し、編隊から離れていたそれは、午前3時ごろ、東方の夜空から火を吹きながら、青梅市柚木町の山林に墜落したのが目撃されている。



ホールフロアに置かれているB29爆撃機のエンジンと、飛龍のエンジン  
（当日、2階から撮影した）

乗員11人のうち6人がパラシュートで脱出したが、その2人は火傷が元で死亡し、戦後に帰還できたのは4人だったという。そんな敵兵がパラシュートで降りてきたら、住民によって袋叩きにされたという話をよく聞くのだが……。何しろ、相手は鬼畜米英だった。

墜落直前にエンジンの一つが脱落し、崖際の道路上に落ち、通行の邪魔になったらしく、地元民が多摩川にころがし落とした。その他の機体部分は戦後アメリカ軍によって回収されたが、これだけ残った。後日、それを地元民が拾い上げ、この資料館に寄贈したという。

右側の金属の塊りは、当時日本の最新高性能エンジンの一部であり、陸軍・四式重爆撃機「飛龍」に搭載されていたものだ。三菱重工製の空冷複列星形18気筒だ。惜しむらくは、ほとんど原形をとどめていない。でも、飛龍の実物部品が残っているのは全国的にも珍しい。（アメリカのスミソニアン博物館に同型エンジンがあるといううわさがある）

飛龍は、終戦4日前の8月11日夕刻、浜松で負傷した人たちを空輸するために、浜松から所属基地のある熊谷に向けて飛行していたが、何らかの機体の不調（エンジントラブル？）により、同じ地域の柚木町の

山林に墜落した。亡くなった12名の全乗員には失礼ながら、終戦に伴って解体する手間が省けたのかもしれないと思ったりした。

この展示コーナーの左側に、それぞれの機体についての説明書きやイラスト、飛龍のプラモデルが展示されていた。どうせなら、同じ縮尺のB29のプラモデルを並べて置いてほしい。B29と比べれば、日本の重爆撃機・飛龍は、おとなとこどももの違いがある。

残骸でしかない金属の塊りであっても、当時の状況やエピソードが付随しているから、なかなか興味深い。実物があれば、見るだけでなく、知る機会が得られる。

## ② 機銃掃射の弾痕（愛川町・平山橋）

平山橋は、神奈川県愛川町平山と田代の間にあつて中津川を渡している。基本的な鉄骨構造（三連トラス）であり、なかなかの姿かたちを保っている。かながわの橋100選に入っている。

1926年に開通したものというから、かなり古い。しかし、車が1台通るのがやつの幅しかなく、いまでは人の通行に限定されている。すこし下流側に平山大橋が造られているから、車はそちらを通る。

鉄骨にところどころ錆が出ており、老朽化している

から、取り壊されても仕方がなかったが、地元の人らの保存の要望があつて残されたものだろう。



平山橋全景

ここは74年前の惨劇の現場なのだ。昭和20年7月10日、荷物（農産物？）を積んだ馬車がこの橋を渡っていたとき、アメリカ軍の複数の戦闘機が襲いか

かった。機銃掃射を浴びせた。彼らは、地上で動くものがあれば、反射的に打ちまくったという。シューティングゲームのように……。



平山橋上で、不審者が見上げて弾痕を探していた

橋の上では逃げ惑うばかりだったろう。このとき、馬車を引いていた男性と、近くに住んでいた女性が射

殺された。私はその情報を知ったのは最近のことだ。愛川町郷土資料館がそれに詳しい。

2019年8月31日、私は愛川町方面に行くついでに、ここに寄ってみた。

橋の外観はなんともないが、よく見ると、鉄骨のところどころに、確かにそれらしい跡が残っていた。不自然にへこんでいるところや、貫通して穴が開いているところがある。それなりの厚さのある鉄板を撃ち抜くのだから、機銃の威力は大きい。

ただし、錆びついて穴が開いたとも思われる箇所もあったから、判然としない部分がある。

### ③ 戦艦陸奥の主砲（横須賀・ヴェルニー公園）

私は2019年9月7日、三浦半島の久里浜方面に行く途中、JR横須賀駅で途中下車し、ヴェルニー公園を歩いた。ここは海に面し、海上自衛隊基地と、アメリカ海軍基地を見渡せるから、それぞれの艦船を見物しようと思った。この日も横須賀本港には、自衛隊の最大級のヘリコプター搭載護衛艦「DDH183いずも」や、アメリカ海軍の黒い潜水艦などが停泊しているのがよく見えた。

海の方を見ていた私だったが、この公園の中に長大



ヴェルニー公園に展示されている戦艦陸奥の主砲  
(写りこんでいる人物は不審者ではない)

な砲が置かれていることにびっくり。表示プレートによると、それが戦艦陸奥の主砲の一本だった。この砲はさすがにすごい。45口径41センチ、長さ約19メートル、重さは、約100トンあるという。海中に沈んでいたものにしては、真新しい。

それがここにあるとは、私には意外だった。広島湾の海中から陸奥の船体の一部が引き上げられたといううわさは以前に聞いていたが、こんな重いものを、はるばるとこの地に運び、展示するとは、どういうわけだろう。

どうやら、陸奥がこの近くにあった横須賀海軍工廠で建造されたからということらしい。調べた情報によると、この巨砲が、最終的にこのヴェルニー公園の一角に据え付けられたのは2017年であって、その3月25日には盛大に記念式典が行われたという。関係者の戦艦陸奥への思い入れがいまだに強いという証左だろう。

戦艦陸奥といえば、戦艦大和が製造されるまで、日本海軍・連合艦隊の主力艦として、国民の間ではたのもしき存在だった。(相手国にしては、相当な脅威だった) 戦艦長門とほぼ同型の2番艦であり、当時最高水準の世界的技術(タービン主機などはアメリカの設計で国産化したもの)と労力と莫大な軍事費で作られ、1921年(大正10)に就役した。長門と陸奥は交互に旗艦を担っており、武力的存在感は絶大だった。ちまたでは「長門と陸奥は日本の誇り」とうたわれた。

しかし、1930年代後半になってからは、戦略は航空戦主体となっていたから、太平洋戦争中、ほとんど出る幕がなかった。陸奥はミッドウェー作戦やソロモン海戦に出撃したけれど、先鋒の航空戦力のはるか後方において、実質的に戦闘に加わらなかった。(私の主観でいえば、日本軍は出し惜しみしていたことになる。結果論的に、戦艦が前に出ておとりになっていれば、大敗せずにすんだろう)

特に陸奥の場合、広島湾・柱島沖に停泊していたときに(軍部は戦力を温存していたと言いつつ)、1943年6月8日12時過ぎ、艦内で謎の爆発が発生し沈没してしまっただから、なさない。戦わずして自滅したわけだ。「日本の誇り」が台無しになった。海軍の面目もまるつぶれに……。非難の矛先が軍に向けられるのを恐れたためだろう、かん口令が敷かれ、長らく一般国民には知らせなかった。亡くなった将兵の家族にも……。

陸奥に思い入れのある人たちにはたいへん失礼な言い方ながら、太平洋戦争に突入する以前から、陸奥は虚栄の存在になっており、もはや戦力外だった。陸奥は、空母の航行速度に付いていけなかったから、足手まといになったりした。

近年では、むしろ戦艦大和やまとのほうが「無用の長物」の代名詞にされたりして、時代遅れぶりを押搦やぶされる。それが備えていた主砲は、さらにこの一回り大きかったわけで、それを想像すると、また感慨深い。

#### ④ エンジン残骸(神奈川県清川村)

丹沢の山奥の沢に戦時中に墜落した複数の軍用エンジンが転がっているという情報を知ったのは数年前だった。丹沢なら地元と言つていいような地域だから、興味があつたが、それは沢登りが必要な山奥のどこかにあり、体力のない私には無理だと思つていた。

最近、ネットで調べ直してみると、具体的な場所やルートを図で示してくれる人がいて、そこならば、私でも行けそうなのに気づいた。車で途中まで行き、アプローチできることが大きい。

2019年9月27日(金)7時50分に家から出発した。車でヤビツ峠を抜けるのは、私がまだ若かつた頃以来のことだ。舗装されてかなり走りやすくなつたが、くねくねと曲がる細い道だから、対向車に気を遣つた。ポイント地点・塩水橋の駐車スペースに車を止め、歩き始めた。行く先の林道には一般車は入れない。上り坂の道を1時間ほど歩くと、丹沢山(156



7 m)の東面を走り下るキューハ沢出合いに着いた。  
ここから沢登りになる。

キューハ沢の第五砂防ダム(堰堤)を目指して、かすかな踏み跡をたどった。このルートは登山道としては未整備であり、ろくな装備を持たない単独行の私にとっては危険がいつぱいだった。かなりの高さのある堰堤が行く手を阻む。私は迂回したりして30分かけて、なんとか第五砂防ダムに着いた。



エンジン残骸をのぞき込む不審者

そして近くに目的のエンジンを見つけた。残骸の約1メートルわきに、搭乗者の遺族によって手作りの木碑が立てられている。表面の文字はもう読み取れない。墓標あるいは慰霊碑の代わりだろう。木碑のもとに添えられたビンや缶は、ここを通りかかった登山者からのお供え物だ。



丹沢・キューハ沢のエンジン残骸と標柱

このエンジンほまれは誉という空冷複列星形18気筒で、中島飛行機製のものであった。出力性能はよかったけれど、製造や整備の難しさ、故障の多さなど技術的課題が多かった。これを搭載していたのが双発爆撃機「銀河」だった。同一機のものと思われるもう一つのエンジンが、かつてこの沢の上部にもあったことが登山者から報告されていたが、今は土砂に埋もれてしまったらしい。私が探索するのはあきらめよう。

墜落機は「銀河」に絞られるのだが、丹沢山系に墜落したと思われる銀河は2機あったので、どちらのものかは判別できていないという。その一機は海軍厚木基地の航空隊「302空」所属の「銀河」であり、昭和19年11月20日の夜、飛来したB29を迎撃するために、本来は爆撃機でありながら、機銃を備えて飛び立ったが、何らかの要因で墜落してしまった。

丹沢山系に墜落した軍用機はほかにもあり、日米両方で複数記録されている。

#### ⑤ 空襲の痕跡（神奈川県平塚）

日本の主要都市と軍関係施設への空襲が一通り行われてしまうと、1945年6月から、地方都市にも本格的に空襲が始まり、私が居住する近隣の市では、平

塚が大きな被害を受けた。平塚には当時、軍需工場がいくつあったから、優先して空襲された可能性がある。でも被害が大きかったのは住宅地域だった。

1945年7月16日深夜から17日未明にかけて、B29の4編隊132機（その他、数種の軍用機6機が伴った）による空襲があった。平塚駅北口近くを中心として（爆撃中心点、各爆撃機はそこに狙いを定める）大量の焼夷弾を落とした。その周辺半径約1.5キロの範囲の市街部の住宅7〜8割が焼け払われたというから、すさまじい。多くの人が焼け死んだ。平塚博物館で、そのときの焼夷弾の破片などを見ることができる。

私は2019年9月29日（日）の朝、乗蓮寺に行った。乗蓮寺は平塚駅より南東へ約1.3キロのところにある。空襲の痕跡が残っているというので、午後から演劇が催される平塚公会堂へ行くついでに訪れた。その空襲のとき、乗蓮寺の隣近所が焼けたが、ここだけほとんど被害を免れた。境内が一時的に死体置き場になったという話もある。

空襲の痕跡の一つが、その墓地にある「田中家」の墓石だ。この墓の施主・田中太一郎さんは、当時召集され、南方戦線にいた。インパール作戦の生き残りで、



捕虜になっていた。帰還したとき、家族から空襲で墓石が破損したことを聞かされ、「欠けたまま残した」と考えたそうだ。



平塚・乗蓮寺に残る  
空襲によって損壊した墓石

——インパール作戦（1944年3月から7月初旬）は、無謀な作戦だったと軍事専門家や歴史家たちが口を揃えて酷評する。軍は、全体的な戦況が悪化する中で、戦線をさらに拡大する作戦を強行した。ミャンマーの奥地からインドに攻め入って、軍功を上げようとしたものだ。インドから中国への補給路を断つためや、インドの独立支援をも口実にしていたが……。

兵隊たちは重い荷物を持たされ、深い川・険しく高い山・果てしなく広がるジャングルを行軍した。多くの者が過度の疲労と食糧不足で体力を失い、マラリアなどの病気にかかった。持たされた食料などは行軍の途中で尽きていた。日本軍は脱落者を多く出しながらもインド領に入ったが、各部隊の足並みが揃わなかったから、作戦行動がままならなかった。

イギリス軍の陣営近くで戦闘が始まると、イギリス軍は、思いがけず姿を現した日本兵に驚きながらも、強力な近代兵器を装備していたから、徹底抗戦した。日本軍は、行く手を阻まれ、機関銃などでめった撃ちにされた。日本軍の弾丸は相手側に届かず、はるか向こうから銃弾や砲弾が飛んできた。一時的に攻勢に出ても、拠点を保てず、持ちこたえられなかった。さらにイギリス軍は戦闘機や戦車を繰り出してきた。ろくな武器を持たない日本軍に対抗するすべはなかった。

やがて弾も食料も尽き果て（おそろしく戦意も喪失し）進攻がもはや不可能になった。かといって、戦線を離脱することはできなかったし、投降することも、もちろんできない。残存日本軍は極限状況に陥った。しかし、指令本部は撤退命令を出し渋った。後日、日本軍が通ったルートは、白骨街道と呼ばれた。戦闘以

外の要因（病死・自決・処分など）で死んでいった者がおびただしかった。

大軍（9万人が動員された。増援部隊を含めると、13万とも言われる）を動かすために必要な物資の供給が絶対的に不足していたし、調達する当てがなく、運ぶための手段がほとんどなかった。それらは事前にわかっていたことだった。こんなへまな侵攻作戦を立案したのは、参謀本部の少数エリート軍人だった。自説を強硬に押し通したことが一番悪いにしても、それを制止しなかった上層の司令官たちの責任が重い。そもそもインドに侵攻することは、高度な政治的な判断が必要のはずだが、それを、目先の手柄に目がくらんだ軍人たちが考えたとはとても思えない。そして、大きな犠牲が出た結果に関して絶対的権力のある本部は責任をとらない（とりたくない）組織なのだし、自分の非を認めない、誇り高い人たちだった。敗戦の責任はすべて現場の将兵にかぶせる。多くの兵士を死なせ、自分だけ生きて帰った司令官の一人は「部下が無能だったから」と言い放った——（インパール作戦について説明すると、つい長くなってしまふ）

奇跡的に生還した田中太一郎さんは、「市民が探る

平塚空襲 証言編」のコラムの中で、「私が生き延びたのはよい指揮官の下にいたからだ」と述懐していた。「空襲とあの時代を語り継ぐためにあえてそのままに残しています」

また彼は、墓石の下部に「祈 平和」と刻している。この墓石（正面は北西に向いている）に、向かって左の側面にえぐれたような跡がついているのは不思議であり、どの方向から、何が当たったのか、よく分からない。状況を考えると、これは投下された焼夷弾が直撃したもののだろうけど、機銃によるものかもしれない。米軍の記録では「テスト発射した」とあるというから、機銃説も捨てきれない。（B29の編隊は南から北へ飛行しながら爆撃したから、落下物なら墓石の南面に当たらずだが……）

参考資料：「市民が探る平塚空襲 証言編」平塚の空襲と戦争を記録する会編、平塚市博物館発行、平成10年3月26日発行